をまわして……』

そのころは、話しことばの文学作品といえば、二葉亭四迷の『浮雲』ぐらいしかありませんでした。この『小公子』を読んだ人々は驚きました。外国の物語を、こんなにのびのびとした日本語で語りかけてくれる作品は初めてだったからです。

賤子が『小公子』を発表してから、現在までの約九十年間、『小公子』は多くの人に訳され、百種類以上の物語や絵本になりました。母から子へ、たくさんの人々に感動を与え、読みつがれてきました。しかし、賤子のつけた『小公子』の題名は今でも変わりません。

賤子の『小公子』は、この語りかける文体とともに、母から子へのやさしい愛情にあふれていることも、人々に多くの感動を与えました。幼いころから両親と離れて、他人の中で暮らしてきた賤子には、暖かい家庭（ホーム）の愛情